

## ⑥水戸城

### ■佐竹義宣<sup>よしのぶ</sup>の三人の妻

鎌倉幕府を開いたのが、源頼朝。

源義家は頼朝から4代遡る源氏の棟梁だ。

義家の弟が義光。その系統が常陸国久慈郡佐竹郷に在し、常陸源氏佐竹家が始まる。

甲斐の武田家は弟の家系になる。源氏の嫡流に近い名門だ。

徳川家は、義家の孫、新田義重を始めとする新田源氏を祖とし、系統的には佐竹氏が上だ。

以来、浮き沈みはあっても500年以上、常陸国の支配を続けた。

1562年、家督を継いだ18代当主、佐竹義重<sup>よししげ</sup>が父を継ぎ、越後の上杉謙信と連携して勢力を広げていく。

だが北条氏が台頭し、次いで、伊達政宗が力を出し始めると押され守勢に入るしかなかった。

そこに、秀吉から臣従するようにとの申し出がある。

活路を見出し、窮地を脱していく。

1590年、秀吉の北条征伐に積極的に参陣し、常陸国54万石を安堵される。

佐竹義重<sup>よししげ</sup>は、大藩の藩主となった。そこで居城を水戸城とすると決める。

秀吉に従わなかった水戸城主、江戸重通<sup>しげみち</sup>を襲い追放し、水戸城を奪った。

江戸氏は佐竹氏の家臣だったが、国人として独立した領地を持ち支配下に収まらない時も多々あった。

長く縁戚関係を続けた佐竹氏一門であり、争ったり和睦したりしつつ佐竹氏に従っていたが、独立性を増し、脅威となっていた。

きっかけは、重通の嫡男と結婚していた義重の次女が、夫と死別し佐竹家に戻ったことだ。

ここで、江戸氏との縁が切れたと、義重<sup>よししげ</sup>が水戸城を奪ったのだ。

江戸重通<sup>しげみち</sup>は妻の実家、結城氏を頼って逃げた。

秀吉は江戸重通<sup>しげみち</sup>を改易し義重<sup>よししげ</sup>の領地としており問題はない。

ここから佐竹氏の居城は水戸城（茨城県水戸市）となり、居城だった太田城（茨城県常陸太田市）からの引っ越しする。

その時、嫡男、<sup>よしのぶ</sup>義宣に悲しい出来事が起きる。

<sup>よしのぶ</sup>義宣の妻、正姫は<sup>しもつけ</sup>下野国那須郡（栃木県）を支配する有力国人、<sup>すけはる</sup>那須資胤の娘（<sup>すけはる</sup>資晴の姉）。

那須氏と佐竹氏は争いを繰り返したが、義重は那須氏の内紛に介入し影響力を強めた。

1572年、ついに、佐竹氏と那須氏は、佐竹氏優位の和議を結び、配下になった。

その条件に、義宣2歳と正姫5歳の婚約があった。

だが、<sup>すけはる</sup>那須資晴は、和議の際、取り決めた条件の実行をせず、一方的に押さえつけようとする義重に納得できない。

1583年、佐竹氏と敵対する北条氏と結び、佐竹氏に挑み、義重を撃退した。

だが、すぐに、反撃され、義重に屈服。

それでも、また<sup>すけはる</sup>那須資晴は、裏切り戦いを挑んだ。

義重の敵ではなくまた負ける。

<sup>すけはる</sup>資晴は降参し和議の実行、婚約中の二人の結婚を願う。

1585年、義重は承知した。

こうして二人は婚約から13年後、結婚し、しばらく和やかな結婚生活を送る。

<sup>すけはる</sup>那須資晴は、<sup>よしのぶ</sup>義宣の義兄弟になり、責ばれるはずだった。

だが、義重は「<sup>すけはる</sup>資晴は裏切ってばかりで信用できない」と冷たかった。

<sup>すけはる</sup>那須資晴は、耐えられず、再び北条氏・伊達氏と結び、義重に戦いを挑む。

このように、関東では熾烈な争いが続いていたが、天下は、信長亡き後をうまくまとめた秀吉が、天下人として政権を作った。

関東の武将も、天下人、秀吉の威光を認め、それぞれ温度差はあるが臣従の意を表明した。

秀吉は、惣無事令を発し、独自の戦いは禁止し、領土紛争の解決は秀吉の裁定にあるとした。

ところが、北条氏は、秀吉の命令に逆らいに無断で領土を争う戦いをしたと、責めた。

北条氏政に非を詫び、臣従の証として上洛するよう求めたが、氏政本人は動かなかつた。

ここで、秀吉は、北条氏の忠誠心を疑い、北条征伐を決める。

佐竹義重は、率先して、秀吉の北条征伐に参陣し、戦い勝利した。

一方、那須氏は、秀吉の元に参陣するのが遅れ、北条方と見なされて改易だ。

正姫 23 歳は、結婚以来、那須家と佐竹家の争いを回避するべく努力し続けたが守るべき実家は滅ぶ。

元々、正姫は望まれない義宣の妻だった。義重は、那須家を嫌っており、正姫を正室として丁重に暖かく接することはなかった。家中も義重と同じ対応だった。

望まれない正室だと日々感じていたが、実家があれば、まだ存在基盤があったが、実家がなくなれば、佐竹家にとって用がない。佐竹家に居場所をなくしたので。

正姫にとって唯一の救いは、義宣の愛だった。

いつも変わらず、優しく正姫を守り、結婚してよかったと感謝した。

義宣にとって、幼い頃に出逢い文を交わした正姫との長い縁はかけがえのない大切なもので、正姫が妻だった。

実家がなくなろうとも妻は正姫だと、慈しんでいた。

だが、正姫にも那須氏嫡流の姫として、誇りがあった。

実家の再興が叶うなら、佐竹家家臣となっても、旧臣を召し抱え、家名を復活させたかった。

だが、義重は、那須氏滅亡に満足しており、難しかった。

正姫は、一人悩み、死を決意し、逝った。

義宣は、正姫の亡骸を見て、悩みの深さをわかっていなかったと、悔やむ

正姫が死を選ぶ原因の一つに、義宣のもう一人の妻、多賀谷氏の珪姫の存在があった。

多賀谷氏は結城氏の家老だったが、主君以上の力を持った。

そこで、結城氏から離れ独立した国人となることを目指す。

本拠、武蔵国騎西庄（埼玉県北埼玉郡）から勢力を拡大しながら、上杉氏・佐竹氏らと同盟を結び、北条氏と戦った。

だが、北条氏から激しく攻められ、当主、多賀谷重経（1558-1618）は防戦さえ難しくなり、佐竹義重と強い共同戦線を組み、支援を頼むしか生き残り策はないと判断した。

そこで、重経は 1583 年、長女、珪姫を義重の元に送り、義宣との結婚を願った。佐竹氏との強い絆を求めたのだ。

義重も裏切りを繰り返す那須氏の正姫より、珪姫との結婚がより有効だと、義宣との結婚式を執り行う。

ところが 2 年後、那須資晴も正姫を送り和議の実行を迫り、約束通り義宣と結婚した。

両家とも名家だが婚約の早い正姫が正室となるのが当然で、珪姫は側室となる。

だが、すでに、珪姫は家刀自として能力を発揮し、家中で確固とした地位を築いていた。

しかも多賀谷重経は、秀吉から結城家与力だが、20 万石を安堵されており、佐竹家には重要な存在だった。

義宣の弟が、多賀谷氏の婿養子に入り、後継となることも決まり、多賀谷氏は、佐竹一門となる。多賀谷氏は、佐竹氏の重要な戦力となっていた。

比べて、那須家は佐竹家を裏切り続けただけだ。

義宣がいかに正姫を守ろうとしても、義重や家中は、珪姫を正室と思う。

正姫も、義宣の妻の座は、珪姫がふさわしいと日々、考えていた。

そこに、1590 年、岩瀬御台が現れた。

子の生まれない正姫は、佐竹氏の後継ぎの母は岩瀬御台こそふさわしい、と考えを変えた。

正姫は、珪姫に同情するが、岩瀬御台こそ義宣にふさわしいと妻の座を引き渡そうとした。

正姫は「3 人の妻は、真面目な義宣殿には、重荷となっている」とひしひしと感じていた。

中で、義宣の愛は正姫に一番深かった。

岩瀬御台の幸せと、子の誕生を願うと、正姫が死ぬことしか道はなかった。

岩瀬御台の説明は難しいが、義宣のいところで、血筋は確かで、可憐な美しさは妻に最適な女人だった。

伊達晴宗（政宗の祖父）は、岩城重隆の娘、久保姫と有名な略奪婚で結ばれた。

結婚の時の約束で、生まれた長男、岩城親隆（1537-1594）が岩城家を継ぐ。

次男が、伊達家嫡男、輝宗（1544-1585）となる。

他に、男子が4人。

長女が、阿南姫（おなみひめ）（?-1631）。二階堂盛義に嫁ぐ。

次女（?-1591）が、一門、伊達実元に嫁ぐ。

3女が、一門、小梁川盛宗（こやながわもりおね）に嫁ぐ。

4女が、彦姫（1552-1588）。会津黒川城主 蘆名盛興。死別後、弟、蘆名盛隆に嫁ぐ。

5女が、茜姫（?-1584）。佐竹義重に嫁ぐ。

娘も多く、計、11名の子だくさんだった。

岩城親隆に佐竹義重の姉、桂樹院が嫁いだ。

こうして、岩城家と佐竹家・伊達家と二階堂家と奥州で名高い強豪同士が結びつく。

中心に、親戚網を広げる伊達晴宗がおり、輝宗そして伊達政宗と続く。

均衡がとれていたかに見えた勢力図だった。

だが、政宗が岩城家の宿敵、田村氏の愛姫と結婚し、同盟は崩れる。

政宗は、田村氏を取り込み大きな野望を抱いて、突き進む。

次第に、伊達勢対佐竹勢の二大勢力に集約されていく。

岩城家は、家中は反田村家・反伊達家が強くなるが、伊達家から養子入りした岩城親隆は優柔不断な態度だった。

そこで、反伊達に家中をまとめたのが、義重の姉、桂樹院だった。夫、岩城親隆は、隠居とされてしまう。

桂樹院と岩城親隆の間に生まれた嫡男、常隆とおなみひめの娘、二階堂氏、岩城御前のいとこ同士が結婚した。

当主となった、幼少の常隆に代わり義重姉、桂樹院が岩城家中を仕切ることになる。

二階堂家は、娘婿の岩城家を支援する。

実家、伊達家を裏切ることになった阿南姫（おなみひめ）だが、二階堂家で確固たる地位を築いており、強大な伊達家にひるまず対決していく。

こうして佐竹氏、岩城氏、二階堂氏が反伊達共同戦線を組み、政宗の覇権主義に対抗する。

義重の妻、茜姫と阿南姫おなみひめは仲の良い姉妹だった。

阿南姫おなみひめは二階堂盛義(1544-1581)との間に、長男、盛隆(1561-2584)と次男、行親(1570-1582)・岩城御前を生む。

嫡男、盛隆は蘆名家の養子となる。

1574年、蘆名家嫡男、盛興(1547-1574)が亡くなり、(伊達晴宗の娘)と結婚し蘆名家を継ぐことになる。

二階堂家は、次男、行親ゆきちかが継ぐ。

阿南姫おなみひめは、二人の子が蘆名家・二階堂家を継ぐことを喜んでいて。

ところが、1582年、二階堂行親ゆきちかが亡くなった。

阿南姫おなみひめは、大切な後継の子を亡くし、途方に暮れる。

そして、蘆名家から岩瀬御台(1574-1639)を、盛隆の養女とし、二階堂家に迎えると決めた。

二階堂家、岩瀬御台に、婿養子を迎えて家督を継がせるのだ。

阿南姫おなみひめの妹でもある彦姫の最初の結婚相手は、蘆名盛興だった。

二人の間に二人の姫が生まれ、その一人が岩瀬御台だ。

そして、蘆名盛興が亡くなり、阿南姫おなみひめの子、盛隆が彦姫と再婚して、蘆名家を継いだのだ。

阿南姫おなみひめは、妹の子を我が子の養女とし、自らの孫として、二階堂家を継ぐ姫としたのだ。

それから7年、阿南姫おなみひめは岩瀬御台を大切に育てた。

愛らしくて、優しい、とても素敵な女人になり、二階堂家を継ぐにふさわしいと自慢の姫になった。

後は良い婿を見つけるだけだった。

岩瀬御台を育てながら阿南姫おなみひめは、二階堂家居城、須賀川城(福島県須賀川市)城主となり二階堂家を率い守った。

城代は、阿南姫おなみひめが最も信頼する家老で、岩瀬御台の父替わりでもあった、須田盛秀。

阿南姫おなみひめと須田盛秀が、協力して守るも、政宗が攻め込むと守り切れない。

奥州統一を目指す政宗は、岩瀬御台の実家、蘆名氏を攻撃、蘆名氏居城、黒川城（会津若松城）を奪い、蘆名氏を追放した。

次いで、蘆名氏と同盟を結んでいた二階堂氏に臣従を求めたが、阿南姫は拒否した。

1589年7月、政宗に打ちのめされ、二階堂氏は敗れ滅ぶ。

阿南姫は、二階堂家居城、須賀川城（福島県須賀川市）を追われた。

居城を追われた阿南姫は、政宗に助けられた。

だが、すぐに、政宗の元から離れ、岩城常隆の元に行き、政宗と対峙する。

政宗は、岩城氏もすりつぶす勢いだった。やむなく岩城氏は、佐竹氏を裏切り和睦した。

佐竹義重は怒り岩城常隆に妻、岩城御前との離縁を命じる。岩城御前は伊達氏と通じていた。

そして、岩城常隆と義重の養女と再婚させ、岩城家を完全に佐竹氏配下に置く。

次いで、常隆が亡くなると、7歳の義重三男、貞隆を岩城家へ養子に入れ家督を継がせる。

阿南姫は、妹、佐竹義重の妻、茜姫と呼ばれ、岩瀬御台を連れて、佐竹義重を頼ると決める。

阿南姫の娘、岩城御前は、母と決別し、義父の実家、伊達家に行く。

岩瀬御台に婿養子をとるはずが、継がせるべき二階堂家は政宗により滅亡し、今後どうすべきか悩む。

娘、岩城御前は阿南姫とは違う生き方を選び、後を託すのは、岩瀬御台しかいない。

佐竹氏の屋敷に落ち着いた阿南姫は、茜姫と二階堂家の再興を話し合う。

この時、蘆名家に生まれ、二階堂家に養女に入った岩瀬御台16歳は、佐竹氏で義宣と出会い胸ときめかす。

阿南姫は、二階堂家を何があっても再興する決意だ。

岩瀬御台と義宣の親しそうにしている姿を見て、微笑んだ。

そこで、妹、茜姫に、義宣と岩瀬御台を結婚させ、生まれた子に二階堂氏の家督を引き継がせたいと頼む。

茜姫は、義宣の正室が3人となると、義宣も大変だと思いつつ、了解する。

義宣も母の思いを聞くと断れない。

正姫は、義宣の苦悩を見て、南姫・茜姫姉妹の想いを聞き、決意を固め、自害したのだ。

岩瀬御台は、正姫を思い心痛めたが、阿南<sup>おなみひめ</sup>姫と共に、水戸城に移った。  
そして、正姫の願い通り、岩瀬御台（1574-1639）は義宣と結婚する。  
だが、二人の間には子が生まれない。

秀吉政権下、佐竹氏は安定していたが、その時は短く 1598 年、秀吉は亡くなった。  
以後、家康の暗躍が始まる。  
だが、義理堅い義宣は、窮地を秀吉により救われたとの考えを貫き豊臣家恩顧であり続けた。

それでも、時勢の流れを読み、領地が常陸であったこともあり、東軍に加担し、天下分け目の戦いを乗り切ったつもりだった。  
だが、義宣が、西軍税を親しくしていた事実が次々明らかになる。

豊臣家との縁をすべて断ち切ることが出来る藩は少なく、大なり小なり豊臣政権に関わった人たちとの縁はあったが、佐竹氏をつぶしたい家康は声高に言った。  
1602 年、西軍加担を理由に改易だ。

それでも、家康政権は始まったばかり、無用な戦いは避けたい。  
義宣の謝罪を受けて、領地半減程度での出羽国秋田郡への国替えを命じる。  
義宣は了解した。

義宣は苦渋の思いで秋田に移る。  
そして、岩瀬御台に力のなさを詫び二階堂氏を再興させる手立てはなくなったと話す。  
岩瀬御台 28 歳は義宣に感謝し、旧臣を召し抱えて欲しいと願う。  
そして、自分は、二階堂氏の終焉を静かに迎え、それまで、旧臣と共に生きたいと応えた。

義宣は、その願いに応じて、岩瀬御台に横手城（秋田県横手市）を任せろ。  
岩瀬御台に仕える須田盛秀を横手城城代とし、二階堂氏旧臣を付けた。

横手城は、義宣が佐竹氏居城にすると一時考えたほどの名城だ。



豊臣家が滅亡した後、幕府は一国一城令を出し、各藩に一つの居城としたが、その例外として存続してもよいと言われたほどの城だ。

波乱万丈の中を生き抜いた、美しき、薄幸の女人、岩瀬御台にふさわしかった。

岩瀬御台は、自分を不幸と思うことは少なかった。

蘆名氏でも恵まれた暮らしであり危険を感じることはなかったし、阿南姫おなみひめに心底可愛がられ、生き方を側で見続けて、面白くてならなかった。阿南姫おなみひめは魅力的な祖母だった。

茜姫からも、娘のように気づかいされて、申し訳ないほどだった。

初恋の人、義宣に愛され、10年近く、家中からも妻として認められ尊敬された。

ただ、家の要になるような教えは受けておらず、阿南姫おなみひめの強い生き方を受け継いでいた。

阿南姫おなみひめのように積極的な生き方とは違うが、自由に学び自分の意志を貫く生き方を学んだ。佐竹家は珪姫に任せ、須田盛秀と共に、自分流に生きる道を選んだだけだ。

岩瀬御台は秋田富士、鳥海山を望む風光明媚な城に住み、桜の見事な滝ノ沢の茶室に遊ぶ。

関東の名門の生まれとしての気品があふれており、教養深く、領民に敬愛され、家臣の精神的支えとなる。

自然を愛で領民家臣に学問を教えながら心静かに暮らし、二階堂家・蘆名家の菩提を弔う。

この暮らしがあっていた。

38年間を過ごすが、幸せだった。

義宣は、秋田藩（久保田藩）主として久保田城に落ち着くと、珪姫と正式に再婚する。

珪姫との間に2歳で亡くなったが、子が生まれていたし、正姫よりも岩瀬御台よりも長く、義宣を支えたからだ。

珪姫はずっと佐竹家の奥を守っていた。

妻となっても今までと変わらず、控えめに肅々と家中を仕切り、要の役目を果たす。

水戸城での暮らしと変わらない暮らしを実現するよう努力し、家中に安心と落ち着きを取り戻していく。

こうして、久保田藩（秋田藩）20万石（実高40万石）は安泰となり、幕末まで続く。